山口大学医学部附属病院から笑顔と情報を発信するコミュニケーションマガジン

山大病院だより

2016 8月号 vol.230

特集 ドクターヘリ運航5周年を迎えて

レポート 熊本地震 DMAT派遣

地域の救急医療から、被災地の災害医療までを支える

特集 ドクターヘリ運航5周年

北は福島から南は熊本まで

先進救急医療センター長　鶴田 良介

平成23年1月に救急医療専門のヘリコプター「ドクターヘリ」が運航を開始して、今年で5周年を迎えました。

私が先進救急医療センター長に就任する約10日前に本院で山口県ドクターヘリの運航開始式が執り行われ、その約50日後には東日本大震災で福島県立医大に出動しました。そして、今年4月16日には、熊本地震で熊本空港に出動しました。

平成26年4月にヘリ格納庫が完成し、台風が接近しても近くの空港にドクターヘリを避難させる必要がなくなったほか、簡単な整備は格納庫内で行うことができるようになり、ますます安全性が高まりました。昨年6月には、事故なく1000回のドクターヘリ運航を達成し、関係者一同、なお一層の安全運航を誓い合いました。

ドクターヘリと災害医療はきってもきれない関係にあります。そもそもドクターヘリは首都直下型大地震などの大規模災害に備えて全国に配備され、平時にはその地域の救急医療を支え、いざという時には、被災地に集結するという構想のもとに運用されています。

さて、ドクターヘリの1回の出動に何人の人が関わっているでしょうか?

ヘリの中に医師、看護師、操縦士及び整

[1]運航開始式 [2]格納庫竣工記念式典にて [3]熊本地震での活動状況

[4]先進救急医療センタースタッフ [5]東日本大震災支援に対する感謝状 [6]格納庫 [7]ランデブーポイントでの着陸時の様子 [8]近隣の小学生による見学会

備士の4人、地上の基地ヘリポートに無線担当のCS※及び警備員の2人、ランデブーポイント(ヘリの着陸地点)には、散水と着陸の安全確保のため消防士が3人以上、救急指令室の1人、最後に救急車内に救急隊が3人と、究極のチーム医療を行うために計13人以上の専門家が1回の出動に集結します。

山口県は全国で5番目に有人離島が多いそうです。私自身も岩国市の柱島に出動した経験があります。ドクターヘリで小学校校庭に着陸し、市職員の運転する車で患者さんの家を目指しましたが、道が狭いため車で家まで行くことができず、広い場所に車を止め、重症患者さんを家から運ぶことになりました。その時、どこからともなく現れた近所のご老人たちと一緒に患者さんを抱えて狭い坂道を下り、車に乗せドクターヘリで病院へ運んだことがあります。

ドクターヘリ診療は、私たちが大学を卒業するときには想像もしていなかった新しい救急医療です。今の学生たちに私はこう説明しています。

「想像してごらん、手術室で顕微鏡を使ったミクロの治療が行われているでしょう。ドクターヘリはその対極にある、ヘリコプターを使った巨大な医療だよ」と。

運航5周年を迎えて関係者のみなさまに改めて感謝申し上げます。今後ともドクターヘリの運航にご支援いただきますようよろしくお願いします。

※CS：Communication Specialist(運航管理者)

REPORT

第7回 山口県ドクターヘリ事例報告会を開催しました

7月23日(土)、医学部第3講義室において第7回山口県ドクターヘリ事例報告会を開催し、県内各消防機関の消防職員や救急指定病院等の医師、看護師など約100人が参加しました。

田口病院長から、山口県におけるドクターヘリ事業への協力に対する謝辞及び今後の救急医療の向上のために更なる連携を図りたいと挨拶がありました。

鶴田先進救急医療センター長から、今回は緊急現場での医療向上を目的に、これまでの事例について参加者とともに検証したいと挨拶の後、金田同副センター長から、平成27年度の山口県ドクターヘリの実績と平成28年熊本地震におけるドクターヘリの活動状況について報告がありました。

事例発表では、山口市消防本部より「救急車内で胸腔ドレナージを要した外傷事例」、宇部・山陽小野田消防局より「現場進出を要した重篤な喘息発作事例」の報告があり、緊急現場で対応したフライトドクター及びフライトナースからもそれぞれの立場から、現場での対応状況等について説明がありました。

そのうちの一例で、実際にドクターヘリで搬送された患者さんを迎え、当時の状況などを話していただきました。患者さんからは、消防署救急隊や医師による救命活動に対する感謝が述べられました。

それぞれ特徴的な事例で、参加者は熱心に耳を傾け、活発な質疑応答が行われ有意義な事例報告会となりました。

(右)田口病院長 (左)鶴田センター長 (下)山口市消防本部による事例発表

活動レポート

山口大学 DMAT 熊本地震被災地へ

山口県からの要請を受け、熊本地震で被災された方の支援を行うため、4月16日～19日までDMAT（災害派遣医療チーム）の派遣を行いました。

藤田救急・総合診療医学講座助教、井原看護師、向江看護師、白石看護師、奥谷総務課職員の5名が、熊本市内での被災者の治療、患者搬送、災害対策本部の運営等を行いました。

3 4月16日 現地での活動

熊本赤十字病院はDMAT参集拠点病院と同時に、熊本市の中心病院でもあるため、被災しながらも災害拠点本部やトリアージセンター等を設置し、随時患者さんを受け入れていました。11時5分に、DMAT調整本部に到着の報告をすると、さっそくミッションを命じられました。

初めてのミッションは患者搬送でした。南阿蘇で10時間家屋の下敷きになっていた患者さんを、熊本赤十字病院から熊本大学医学部附属病院へ、DMATカーで搬送することとなりました。12時55分に、熊本大学病院まで無事に運ぶことができました。

熊本赤十字病院に帰還後、待機となり、この日は19時に活動を終了しました。

4 4月17日

熊本赤十字病院に集合後、ミーティングで、熊本市内の東病院の支援を行うこととなりました。東病院は病床数63床の二次救

6 4月19日 山口大学病院への帰還

様々なミッションを完了し、13時に本院へ帰還しました。

活動を終えて

もう少しやれたかもしれないという心残りはありましたが、全力で被災地支援を行ったと胸を張って帰ることができました。今回の活動では、本院及び事務部による後方支援が非常に心の支えになりました。被災地では、病院自体はもちろん、病院職員も被災したなか、皆極限の状態で働き続けていました。この派遣で、患者搬送などは行いましたが、特に病棟業務については、積極的に支援を求めらませんでした。病院支援の際は、支援される側の「大丈夫！」を鵜呑みにせず、自分たちの目で支援の必要性を判断し、積極的に介入していく必要性を感じました。

日本のどこであろうと大規模災害が起きた場合には、病院全体で取り組む必要があります。その中でも、DMATは災害医療に関する特殊な訓練・研修を受けている集団であり、今回の熊本地震でもその能力が十二分に発揮できたと思います。このような能力を山口大学に少しでも還元できるよう努め、災害に強い病院づくりに寄与していきたいと思います。

（文責：総務課 奥谷）

食料支援を行いました（4月19日）

九州大学を通じて要請があり、本学職員が医学部附属病院保管の食品関係の物資（3日分、約800kg）をトラックに積み込み、被災者を受け入れている熊本大学に向けて出発し、16時30分頃熊本大学に引き渡しました。

食料をチェック

トラックに非常食を積み込む職員

1 4月14日 余震

14日21時26分、熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード6.5（暫定値）の地震が発生、最大震度7を観測。DMAT待機基準（震度6弱以上）に該当のため、隊員は待機しましたが、出動要請はありませんでした。（15日0時30分待機要請解除）

2 4月16日 本震から出動まで

16日1時25分、熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード7.3（暫定値）の地震が発生、再び最大震度7を観測。4時23分、山口県から出動要請があり、5時30分、出動隊員が本院に集合し、同時に病院長の指示の下、総務課において後方支援体制の構築を行いました。7時36分、資機材や薬剤等を積み込んだDMATカーは、DMAT事務局から指示された熊本赤十字病院に向けて出発しました。

本院のDMATカーは、資機材を運ぶことはもちろん、患者搬送が可能です。緊急車両登録をしており、緊急時には赤色灯やサイレンにより優先的に通行することができます。今回の熊本地震においても、一般車両の通行が制限されている箇所がありました。

急病院で、介護老人保健施設も隣接設置されています。水は井戸水、電気は自家発電と、最低限のライフラインが稼働している状況でした。東熊本病院（南阿蘇）から避難をした慢性期の患者を受け入れており、救急外来と入院患者の対応を依頼されました。

東病院には、本院の他5チームのDMAT隊が参集しました。本院はDMAT本部の運営と入院患者の管理を行いました。特に、東熊本病院から受け入れている28名の患者を転院搬送することが最大のミッションでした。

5 4月18日

熊本県庁DMAT調整本部の支援を行いました。

本部には食料や水等の支援物資や救護所の状況、道路の被災状況等様々な情報が集約されていました。これらの情報を戦略的に活用するため、警察、消防、自衛隊等様々な機関が連携を密に行っていました。また、医療ニーズの選別を行い、支援が必要なところの漏れがないかを確認し、被災地全てを支援できるよう調整していました。

被災から3日目となり、JMAT（日本医師会災害医療チーム）や保健センター等では通常の医療体制の復旧に向け体制を整えていきました。

ホットなニュースをご紹介

山/大/病/院 NEWS Part 1

NEWS

平成28年度 災害対策訓練を実施しました

災害対策本部訓練

DMAT医師による講習

6月29日（水）、電力低下時の対応を訓練テーマとして災害対策訓練を実施しました。

最初にDMAT（災害時派遣医療チーム）の医師から、「災害時における対策本部の運営」と題して、対策本部の役割・情報収集と伝達・記録の重要性の講習を行い、災害対策本部長の病院長をはじめ、災害対策本部構成員の副病院長や事務職員など39名が熱心に受講しました。

引き続き、地震発生を想定した災害対策本部運営の訓練を行い、DMAT隊員の助言を得ながらの対策会議、電力低下時を想定した無線による情報収集や報告を実践しました。

参加者アンケートからは、「業務システムが使用できない場合の手順を再確認する必要があると思った」「停電の影響を改めて考えることになり役立った」のほか、「対策本部内で情報共有しやすいようレイアウトを変更した方が良い」「記録方法や無線の使い方等に慌てないための手順書が必要」などの提案もありました。

また併せて、災害時の病院機能を維持するための電力供給や職員配置計画の参考とすることを目的として、各部門における電力低下シミュレーションと職員の通勤所要時間について参集状況調査を行いました。自家発電機から供給される非常用電源の位置と接続機器の確認、電力低下にともなう治療・診療・検査機器などへの影響や対応方法をシミュレーション票に取りまとめました。

今後も引き続き、災害対策、対応方法の改善を行ってまいります。

肝疾患コーディネーターの活動紹介

～山口県唯一の肝疾患診療連携拠点病院～

山口県肝疾患コーディネーター研修会

国内には肝炎ウイルスに感染している方が、B型肝炎は110～140万人、C型肝炎は190～230万人いると推定されています。肝臓がんの多くはウイルス性肝炎が原因ですが、感染者の半数近くの方がウイルス感染に気づかない現状があります。ウイルス性肝炎は、早期診断と治療により病気の進行を予防できることから「肝炎ウイルス検査の推奨」「陽性者への受診推奨」「受療支援」といった肝炎対策が全国的に勧められています。

肝炎患者さんを早期に発見し、適切な治療に結びつけられるよう相談支援や情報提供を行うことができる専門的知識を持った肝疾患コーディネーター（保健師・看護師・薬剤師・管理栄養士・医療ソーシャルワーカー）の養成が山口県で平成24年度から開始され、本院には31名（県内には294名）のコーディネーターが在籍しています。

本院は県唯一の「肝疾患診療連携拠点病院」であり、県内における肝疾患診療の向上と均てん化※を図るため、診療体制の整備や診療連携ネットワークの構築を責務としており、肝疾患センターを中心にコーディネーターが活動を行っています。

主な活動として、肝炎ウイルス検査の啓発、肝臓病教室、相談支援のほか、県内コーディネーターの資質の向上や連携、活動の充実に向けたサポートのため、養成講習会での講義、コーディネーターフォローアップ研修会の運営、コーディネーター連絡協議会の開催なども行っています。また、「世界肝炎デー」や「看護の日」のイベントにおいても、リーフレットなどを配付して肝炎ウイルス検査を呼びかけています。

山口県の肝臓がんの死亡率は全国でも上位です。この啓発活動により、一人でも多くの方に検査を受けていただき、陽性と判断された方には早期に専門医療機関を受診するきっかけになればと思います。今後も、地域での啓発活動の拡充にさらに力を入れていきたいと考えています。

肝臓に関して相談がありましたら、コーディネーターが「かん太バッジ」をつけていますので、お気軽にお声をおかけください。

※地域格差をなくし、全国どこでも等しく高度な医療をうけることができるようにすること

当院のコーディネーター活動の詳細については、
肝疾患センターホームページをご覧ください。
http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~kanzou/index.html

栄養治療部 季節のレシピ recipe

Today's menu チキンチキンごぼう

今回は、食欲がない中でも甘辛いこの味なら食べられるチキンチキンごぼうを紹介します。
山口県の学校給食ではおなじみの一品なので、懐かしさを覚える人もいらっしゃるかと思います。
通常は揚げて絡めるのですが、今回は焼くことで、エネルギーダウンに挑戦してみました。
地産地消ということで山口県産の長州どり、美東ごぼうを使って考えられた学校給食のメニューだそうです。
ご家庭で、山口ならではの食材で作ってみませんか。

材料　1人分

- 鶏もも肉(皮なし)…… 60g
- ごぼう…… 40g
- 人参…… 15g
- さやいんげん…… 10g
- 片栗粉…… 4.5g(大さじ1/2)
- 醤油…… 4g(小さじ1)
- 砂糖…… 2.5g(小さじ1)
- 酒…… 2.5cc(小さじ1/2)
- みりん…… 3cc(小さじ1/2)
- 油…… 2g(小さじ1/2)
- ごま油…… 1g

栄養成分　エネルギー 170kcal　食塩 0.6g

いんげんの効用

ビタミンB群が豊富に含まれているため、エネルギー代謝を活発にし、疲労回復や夏バテ防止に役立ちます。また過酸化脂質の生成を防ぐため動脈硬化症の予防にもつながります。カロテンも含まれるため、皮膚のトラブル改善にも役立ちます。旬のこの時期にしっかり食べましょう。

◎出典：食の医学館

作り方

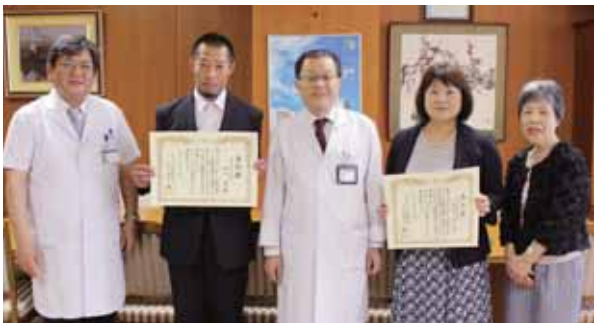
1. 鶏肉は食べやすい大きさに切り、ごぼう・人参は約3mmの厚さの斜め切り、さやいんげんは5cm程度に切る。
   ごぼうは切った後、水にさらしておく。
2. 調味料を混ぜ合わせておく。
3. 野菜は下茹でし、水気を切った後、片栗粉をまぶしておく。
4. 鶏肉にも片栗粉をまぶし、油を敷いたフライパンでこんがりと焼き目がつくまで焼く。
5. ③の野菜を入れてさらに炒め、②の調味料を入れてからめる。
6. 仕上げにごま油を入れ、さっとからめて出来上がり。

通常揚げるところを焼いているので、約100kcalエネルギーダウンしました!!!
ごぼうは切り方を工夫し、下茹でをしっかりすることで、高齢者の方にも食べられる一品になります。
片栗粉を使うため、肉汁が流れ出ず少量の調味料がしっかりと絡みます。

◎監修：管理栄養士　有冨早苗　福田有子

NEWS

平成28年度 病院優良従業員 表彰伝達式を行いました



6月21日(火)、「平成28年度病院優良従業員表彰」伝達式を行いました。

この表彰は、社団法人山口県病院協会から、県内の病院に従事する勤務成績の優秀な病院職員に贈呈されるものです。

伝達式では、田口病院長から受賞者に表彰状が授与され、本院への功労に対する敬意ならびに今後のさらなる活躍を期待する旨の祝辞がありました。

受賞者は次のとおりです。

受賞者	看護部	看護師長	宇都宮淑子
	栄養治療部	調理主任	溝口豊

NEWS

キャリアナビゲーション in 山大を開催しました

6月9日(木)と7月1日(金)、医学生・研修医を対象とした進路説明会「キャリアナビゲーション in 山大」を開催しました。

本院の各診療科(部)や県内の15の協力型臨床研修病院がそれぞれのブースで研修の特徴や研修医への教育支援体制、キャリアサポート体制などの説明を行いました。本年で5年目の開催となり、両日で183名の参加者がありました。

参加者のアンケートでは、「入局後の具体的な話を聞けて参考になりました」「ポリクリ※中に聞けなかったことが聞けて良かったです」「どの病院もしっかりと説明をして下さり、非常に貴重な時間となりました」など大変好評でした。

※ポリクリ：医学部高学年における病院実習のこと

NEWS

平成27年度 医学部附属病院 治験功労者表彰式を行いました

6月15日(水)、平成27年度医学部附属病院治験功労者に対する表彰式を執り行いました。

この表彰は、治験の推進に特に顕著な功績があった個人及び団体を表彰するものです。

表彰式では、田口病院長から個人賞として治験症例を多く登録した医師の表彰の後、敢闘賞として、チームとして各種検査等に協力した部門のスタッフの表彰がありました。また治験への貢献に対する謝辞ならびに今後の更なる活躍に期待する旨の祝辞がありました。

平成27年度の受賞者は、次のとおりです。

個人賞

第一位	泌尿器科	講師	長尾一公
第二位	泌尿器科	助教	山本義明
第三位	神経内科	准教授	川井元晴

敢闘賞

泌尿器科病棟
病理診断科

NEWS

福田副看護部長が 山口県健康福祉功労者知事表彰を受賞

このたび、看護部の福田美登里副看護部長が「平成28年度山口県健康福祉功労者(優良看護職員)知事表彰」を受賞しました。

この表彰は、社団法人山口県病院協会から、長年にわたり看護業務に従事し、県民の保健福祉の向上に顕著な功績があった優良看護職員に贈られるものです。

福田副看護部長は「思いがけずこのような賞をいただき、大変感謝しております。長く働いてきたこと以外に特別なことはしておりません。お仕事をご一緒させていただいた皆様に公私にわたって助けていただき、さらに管理者になってからは地域の管理者の方々に支えられました。皆さまにお礼申しあげます」と、受賞の喜びを語られました。

編集後記

夏休みも残りわずかですね♪ まだまだ暑い日が続きますので、みなさまお体にお気をつけください。
今回は、ドクヘリやDMATなど災害に関する山大病院の取り組みをご紹介しました。表紙のドクヘリヤマミィは今号のみの特別登場です。

皆さんからのご意見・ご感想をお待ちしております。
今後読んでみたいテーマ、興味のある記事などお気軽にお寄せください。
FAX 0836-22-2113 E-mail me202@yamaguchi-u.ac.jp

企画発行：山大病院だより編集委員会
事務担当：山口大学医学部総務課総務係
〒755-8505 山口県宇部市南小串一丁目1番1号
TEL 0836-22-2007 URL http://www.hosp.yamaguchi-u.ac.jp